

行政情報

Administrative Information

#03

100万人都市水士里^{みどり}のシンポジウム 学校とともに考える農業・農村の未来

北海道開発局農業水産部農業設計課

北海道開発局では、農業・農村を良好な状態で次世代へと引き継ぐための様々な取組を行っています。その一環として、平成20年1月11日、札幌エルプラザにおいて、教育、農業、報道及び行政関係者によるシンポジウムを開催。先生や学生をはじめとする約300名の方にお集まりいただきました。本稿では、このシンポジウムの基調講演及びパネルディスカッションについて紹介します。

基調講演

子ども農山漁村交流プロジェクト



倉見 昇一 氏
文部科学省初等中等教育局児童
生徒課課長補佐

3省連携の大プロジェクト

このプロジェクトは、文部科学省、農林水産省、総務省の3省が連携して行う非常に大きなプロジェクトです。子供たちの学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育成し、力強い子供の成長を支えることを目的に、農山漁村での1週間程度の長期宿泊体験活動を推進し、同時に農山漁村の活性化にも寄与するものです。来年度、各都道府県10校程度のモデル校からスタートし、2013年度には全国約23,000の全ての小学校に拡大する予定となっています。

成長に不可欠な体験が失われた現代

まず、このプロジェクトの背景をお話する必要がありますのかと思います。そもそも文部科学省といたしましては、子供たちに様々な体験をしてもらいたいと思っています。

その体験というのは、自然体験や農業体験もあるでしょうし、ボランティア、社会奉仕、また、自分たちが住んでいる地域の人たちとの交流ということもあるかもしれません。

本来こういった体験というのは、今までは普通に自分たちの身の回りであって、あえて学校でセッティングしなくても、学校から帰って友だちと遊びに行ったりとか、家の手伝いをするとか、子供が健全に成長していく上で大事なことが普通にあったわけです。

これが、都市化だとか少子高齢化、情報化といった中で徐々に失われてきており、子供たちの成長のために不可欠な直接体験が、その機会をセッティングしてあげなければ、できなくなってきているということが大きな背景としてあります。特にインターネットや携帯電話など、もちろんそれは社会が高度化していく中

で必要なものなのでしょうが、そのマイナス面といえますか、そういったものが子供たちに随分影響を及ぼしています。自分の手で触ったり、自分の目で直接見たり、においをかいだりといったような、人間が本来持っている五感を働かせて、自分で経験する、体験するといったことがぐっと少なくなっているわけです。今、ニュースを見ると、すぐ平気で人を傷つけたりとか、自分の大切なご両親をあやめてしまったりとか、いじめとか、不登校などといったようなことも全部影響しているのではないかと感じています。

教育効果は一石何鳥も

農山漁村に行けば、山もあれば川もありますし、ここでホームステイみたいなことをすれば家族のような触れ合いもあるでしょう。また、1週間といった期間でやることによって、いろいろな乗り越えなければいけないものがあると思うのです。例えば、今自分の家のトイレでないと用を足せない子供がいるそうですが、1週間もいればどうしてもそこでしなければならぬとか、好きな友達とだけではなく、いろいろな友達と話をしなければいけないとか、集団生活のルール、自分の役割や責任だとかいろいろなことが学べます。このように、ある程度の期間の宿泊を農山漁村でやるということはいろいろな観点・要素を持っていて、一石何鳥もの教育効果があるだろうと思っています。

単なる「農業体験」ではない

本日のもう一つ大きな観点であります「食」ということに関して、実際に現地で自分たちが直接その農作業をしたり、そこで働く人たちのお話を聞いたりすることで、食べるということに対するありがたみを感じることができます。お金さえ払えば食べものを買えて、消費期限が切れれば、それは安全のために必要なことなのかもしれませんが、無造作に捨てられていくような、「もったいない」という感覚、一つの食べ物が、どれだけの苦労があつてつくられ、自分の手元に届くのかといったことが見えにくくなっています。体験学習では、日ごろできない、見られない経験をして、いろいろな糧にしていきたいと思っています。

交流プロジェクトは「感動体験」

宿泊体験に先進的に取り組んでいる自治体の方々のお話を聞くと、1泊、2泊でもホームステイを体験して帰るときには、また来るね、ありがとうとあって、涙を流しながら別れていくというシーンが実際にあるというふう聞いています。それだけそこに感動的なこと、教育的な効果があるのだろうと確信していま

す。学校関係者と農業関係者の方々、受け入れ地域の皆様方の協力を得て、このプロジェクトを成功させていきたいと思っていますので、ぜひよろしくお願ひしたいと思ひます。

パネルディスカッション



シンポジウムの後半では、学校教育と農業・農村の連携した活動等についてのパネルディスカッションを行いました。各パネリストには、それぞれの立場から連携についての思いなどを語っていただきました。

食・農・地域を知らない子供たち

岡内 子供たちの現状として、まず自分の住んでいる



パネリスト
岡内 猛氏
浦河町立狹伏小学校長

地域をよく知らないというのがあります。そこに生まれて住んではいませんが、その地域が一体どういう地域なのか、何によって支えられているのかを知らないので学ばせたい。そういう思いがスタートとしてありました。

では、うちの小学校では何ができるのだろうか。地域には水田があって、農業が盛んである、漁業も盛んである、森林の資源もある、ということを考えますと、水と川と海と山という自然の連続性というものを子供たちに学ばせたいと思っています。

食育についても、自分が食べるものがどこから来てどうなっているのかということ子供たちは知らない。農村地帯の子供でさえ例外ではない。農業のことを知らないということであれば、食べるものについても知らないだろうと。そのあたりをいろいろ工夫して教えていかなければならないのではないかと考えています。

農作業の大変さを子供たちに伝えたい

池沢 私どもの当麻土地改良区では、田植え体験を小学5年生にやっていただいているのですが、今の子供たちに「手植え」といってもまずピンと来ない。なぜかというところ今の農家の方は大きな機械に乗って農作業をしています。子供たちもそれを見ているので、何だこんな楽なことかと考えている。これではウマクナイということで、体験学習



パネリスト
池沢 和義 氏
当麻土地改良区理事長

のときには、昔、おじいちゃん、おばあちゃんたちは腰を曲げて田植えしたのだと強くいっています。子供たちも、初めは何かピンと来なかったようですが、田植えをしていくうちに、すごく腰が痛い、足下もぬかるし大変だと。そういうのを見ると、ああ子供たちも少しは農業がわかったのかなというふうに感じます。

学校における農業体験学習の意味

倉見 このシンポジウムでは、水土里の「里」の部分、つまり、人のネットワークに着目した活動に取り組まれています。開発局さんのお仕事は、農業基盤整備、要するに土地と水の整備だけだと思っていましたが、それに新たなもう一つの基盤として「人」が加わったのではないかなと思います。今回のシンポジウムは、そういう画期的な、大事な意味があるのではないのでしょうか。



こういうシンポジウムを、この北海道でやっているということは、逆な意味でいえば、子供たちにとっての危機感みたいなことを表しているのではないかと考えています。よく、交流プロジェクトの話をする、それは都会の子供たちのためのものと考えている人が多いのですが、自然豊かな北海道でも、そういう体験をセッティングしてあげないと子供たちができていけないというような現実があり、それが危機感につながっているのではないかと感じます。

それから、今日は学校の先生や将来先生を目指している学生さんも来ているようなので触れますが、保護者の方の中には、学校の活動の中で、田んぼで泥んこになったりすることをよく思わない方も結構いるのです。ですから、なおさら地域を巻き込んで、その理解のもとに活動をやっていくことが必要だと思っています。

それと、学校側もこういうことをすることによって、子供たちに何を身につけさせたいのか、どんな力が身についたのかということきちんと説明し理解を得ていかないといけないのだと思います。そういうことなしにやっていると、一体活動に何の意味があるのかといったことになりかねません。よく周りの人に理解を得ていくということを意識することが、活動のポイントだと思っています。

食育から食農教育へ

久田 私は、農業あるいは一次産業が必要としている人というのは、担い手だけではないと思います。つまり、一次産業のことを大事だと思ってくれて、日本でとれたものをおいしくいただくという人たちをしっかりとつなぎとめることなのではないのかなと思います。



パネリスト
久田 徳二 氏
北海道新聞社本社編集局
報道本部編集委員

以前、私が農林水産省を担当していたときに、向かいの経済産業省にも行ったり来たりしていたのですが、この二つの省で考え方が全く違うのです。WTOの問題が勃発したときに、輸入自由化をどんどんすべき、安いものを買うのは当たり前というのが経済産業省の考え方です。その下でつくられている経済財政諮問会議なんかは、はっきりいえばもう農業解体論に走っています。日豪EPA*の話では、北海道の財界は道内の農業を支えるといっていますが、東京ではどんどん交渉を進めてくださいということに既になっています。

ただ、日本が食えなくなったときに、一番最初に問われるのは、北海道がどれだけ食料を供給してくれるのかということに、私の考えでは10年、20年ぐらいのうちに必ずなると思います。そのときに、北海道は生産できているのかどうかということです。

それから、生産力をキープするという以上、北海道の農業には実はもっと大きな役割があると思っています。本州などの中山間の耕作放棄はもう既に進んでいて、1割を超える耕作しない土地が生まれています。そして、そういうところには人がいません。人

* 日豪EPA交渉：EPA（経済連携協定）とは、モノ・サービスに加え、投資の自由化や知的財産権など幅広い分野を含む協定のことをいい、特定の国同士やグループ国間で貿易のルール作りを目指すものである。

日本とオーストラリアは、2007年から交渉をスタートしているが、オーストラリアの輸出する農畜産物は、日本でつくられているものと同じものが多く、農業の経営規模も1,900倍と格段に大きいため、農業分野の貿易自由化が進んだ場合、日本の農業に深刻な影響があるのではないかと懸念されている。

がいなくなれば、やがて地域が崩壊する。地域にとどまって、学校へ通って、そこで産業を営もうという人はなくなっていく。そんなことで本州はどんどん進んでいく。同時に、農業を知りたいという子供たちや大人たちに、これが農業なんだよと教えられる場がどんどん少なくなっていく。ひょっとしたら、近い将来には北海道にしかないかもしれない。つまり、北海道はそういう教育の場も全国に提供して、日本の農林水産業を支えていかなければならないのではないかと考えています。

そういう意味でも、食育は、栄養指導の面だけでなく、その先にある農業の部分をもっと色濃く出すべきだと思っています。食育を「食農教育」というふうに発展させて、こうやって各省庁間の連携で、あるいはいろいろな人たちの連携でやられることを切に望んでいます。

私たちは子供たちの何を育てるのか

佐々木 皆さんは、親から「お百姓さんが八十八の手間をかけてつくったお米を残したら罰が当たりますよ」というふうに育てられた経験はお持ちですか。



コーディネーター
佐々木 貴子 氏
北海道教育大学教育学部
札幌校准教授

当たり前ですが、今の子供たちは、戦争で食べられない時代を過ごしてきていません。今の子供たちの離乳食なんてフルコースですからね。そういうものを食べて育ってきた子供たちにとっては、その裏側というか、食べ物の裏側にある人の姿、人の手が見えていないのではないかと思うのです。

農業を活性化させていくというその前に、子供たちの心を育てていくこと、食べものの裏側にある苦勞、そして人間はその食べものがなければ生きていけない。食べものを通した生きることへの感謝。それをどうやって教えていくのか。私はその部分がとても大事なのではないかなと思います。

確かに子供たちに体験をさせることは大切ですが、単なる体験で終わってしまっちはちょっと足りないのではないかなと考えるのです。

なぜそのようにいうかといいますと、函館のある小学校の話なのですが、6年生がヨード反応の実験のためにジャガイモを植えることになりました。子供たちは、ジャガイモの栽培は2年生で教わっていたので、育て方はわかっていました。ただ、2年生のときは一

生懸命育てましたが、今回は目的が実験用のジャガイモですから、放ったらかしで育てた。そして、でき上がって、さあこれを食べようとなったとき、子供たちがこんなものを食べるのかといった。それを聞いた先生は、これではいけない、きちんと子供たちに勉強させなければいけないと感じました。そこで、農家のおばちゃんに協力してもらい、おばちゃんがつくったジャガイモと自分たちがつくったものと、どちらがおいしいか比べてみました。子供たちは自分たちがつくったジャガイモの方が絶対においしいといたかった。けれども、おばちゃんのジャガイモの方がおいしかった。ある子供が、どうしておばちゃんの育てたジャガイモはおいしいのかと聞くと、おばちゃんは「私が育てたのではないよ。水と土と太陽が育てたんだよ。私はジャガイモが育ちやすいように環境を整えただけだよ」と答えました。これを聞いたときに、子供たちの意識が随分変わったのです。そして、作物を育てることの大切さ、食べることの大切さというところに目が向いたのです。

農業体験学習をさせようというときに、単なる体験ということではなくて、本当に農業を理解したり、担っていけるような子供たちにしていくというところに持っていくには、教育、学校だけではこれはできないと思います。

今日のテーマにある「学校とともに」というのを、学校にいる子供たち、と考えたときに、子供たちの何を育てようというのか。それは知識でしょうか、体験でしょうか、どういうことを育てながら、どのように農業や農村の未来というのにつなげていくのか。これからは、そういうことを考えていかなければならないのではないのでしょうか。

*

今回のシンポジウムは、昨年に引き続き学校教育と農業・農村の連携をテーマとし、ここでご紹介したもののほか、道内四つの小学校の先生から取組事例を報告していただくなど、たいへん内容の濃いものになったと考えています。北海道開発局では、今後も様々な方法で、学校教育と農業・農村との連携について取組を進めていきたいと考えています。